

【論文】

禅画と人文社会科学の視点 —価値多元化社会における仙厓の後世への最大遺物「○△□」考—

Zen Painting, Humanities and Social Sciences:
Understanding Sengai's Greatest Legacy ○△□ in a Multicultural Society

真 屋 尚 生
MAYA Yoshio

目次

1. 異端の問題提起
2. 縦書き一行一字
3. 「厓画無法」縦横無尽
4. 「○△□」記号考
5. 「○△□」視覚考
6. 「○△□」上州人考
7. 「○△□」大学人考
 - (1) 金平糖と理工学系の発想
 - (2) 金平糖と人文社会科学系の発想
 - (3) 大学人の「心核」
8. 「下」と「奥」一字違いで大違い
〈主要参考文献〉

(要旨)

仙厓義梵の筆墨禅画「○△□」は、幼児にでも描けそうな単純素朴な墨絵でありながら、実に豊かな思索の「心核」を内包している。私は、禅学に関してはまったくの門外漢ではあるが、社会科学の領域における研究者としての問題意識と読書を中心にした日本語を母語・母国語とする生活体験と若干の西洋美術鑑賞歴を拠り所にして、知るかぎりにおいて先学諸氏がほとんど着目しなかったのではないかと、と思われる「○△□」が内包する、禅の世界を越え、広範多岐にわたる問題提起を可能にする知的感性を喚起し活性化させる、触媒としての多義性を掘り起こし、最広義における人文社会科学の視点からの、その今日的な意義の解明に努めた。

ここでいう「○△□」の多義性に関わる代表的な項目は次の通りだが、これらについての行論が必ずしも順を追ってなされているわけではない：日本語の書字方向、禅画の含意、図形・記号としての「△」、料理と芸能、平和至上主義、金平糖、読書と人間形成、人物月旦、大学

人と知識人、知性と学識、ほか。

仙厓には、道歌ともいうべき句「楽しみハ花の下より鼻の下」がある。私は、基本的にこれに同意するが、より以上の楽しみが「鼻の奥底」にはあり、「楽しみハ花の下より鼻の下ハナの下より鼻の奥底」と考える。

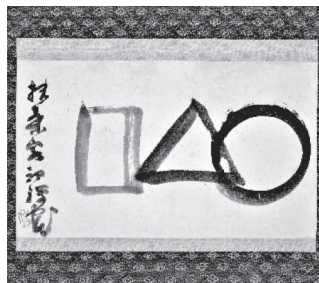
『新約聖書』にいわく：人の生くるはパンのみに由るにあらず。

またパスカルいわく：人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える葦だ。

1. 異端の問題提起

仙厓義梵（扶桑最初禅窟臨济宗古月派安国山聖福寺 123 世住職：1750-1837 年）の筆墨禅画「○△□」（出光美術館所蔵：画像 1 参照）は、左から右に「□」「△」「○」が 1 列に横並びになっただけの構図の、単純素朴な墨絵だが、その解釈には諸説あり、大別すると、次の 3 説に集約されるようだ（出光美術館，2018，p.115）。

- (1) 悟りに至る 3 つの段階
- (2) 神・儒・仏の 3 大宗教／天台・真言・禅の 3 宗派
- (3) 宇宙 (universe)



画像 1 仙厓「○△□」（出光美術館所蔵）

世に名高い「○△□」について卑見を縷々述べることは「無言真に功有り」（無門，2007，p.112）の禅の教えに背くが，21 世紀の今を価値多元化社会ととらえることができるとすれば，異分野／異次元からの異端の問題提起も許されるであろう。批判精神を堅持し，引用を効果的に用い，発想の転換による新しい論理の展開の可能性の探求に努める。これが本小論における私の目論見であり，3 人の先人による次の言葉が私に勇気を与えてくれた。

- (1) まず経済学者・山田雄三教授（1902-1996 年）の次の言葉（城山，1999，p.123）を掲げたい。「価値は多元だけれどもお互いに相互批判しなければいけない。学問の問題は，多数決で合意するということにはならないんで，むしろ相互批判をしながら一歩ずつ進めていく。」私は，若き日に山田教授の主著の 1 冊『社会保障政策論』（東京大学出版会，1977 年）の書評を執筆したことから，教授に指導を仰ぐ機会を得た（真屋，1978，参照）。

- (2) 続いて世界の文豪・沙翁 (William Shakespeare, 1564-1616 年) から、「悪魔でも聖書を引くことができる、身勝手な目的にな」(シェイクスピア, 2010, p.34) と、効果的な引用による詭弁の弄し方を教えられた。
- (3) そして世界に知られた日本の仏教学者・鈴木大拙教授 (1870-1966 年) からは、「立場をちょっと変更して見ると、価値の顛倒は到る所に見られる」(鈴木, 2007, p.146) と、融通無碍の考え方がありうることを教えられた。

ことの起こりは、上州高崎在住の旧友・松村哲夫君から届いた 1 通の電子メールだった。同地に「串揚げや〇△□」という居酒屋があるとのこと (画像 2 参照)。店名は、縦書きでは「〇△□」(図 1 参照)。横書きにすると、左から「〇△□」(画像 2・図 2 参照) の順に並び、「ひふみ」という仮名が添えられていた—「〇」は一筆 (ひとふで), 「△」は二筆 (ふたふで), 「□」は三筆 (みふで) で、それぞれ書く／描くことができる。これをつづめて「ひふみ」。仙厓の代表作ともいえる右から順に「〇」「△」「□」が並ぶ禅画「〇△□」(画像 1・図 3 参照) を知ってか知らずか、横に並べると、「□」と「〇」の位置が左右逆さになっているのはご愛敬。前掲の大上段に構えた「〇△□」解釈とは異次元の、なかなか面白い発想だ。



画像 2 高崎「〇△□ ひふみ」の看板 (真屋撮影, 2022 年 11 月)



図 1 縦書きの
「〇△□」



図 2 左からの横書きの
「〇△□」



図 3 右からの横書きの
「〇△□」

これに触発され、「野狐」(無門, 2007, pp.28-33) の域にも達せず、禅に関しても禅画に関しても半可通とさえいえない私が、大胆不敵にも「仙厓研究」先学諸氏とは少し違った人文社会科学／文化社会経済観察を土台にした、複雑系複眼思考に基づく難易度最高級の公案ともいべき「〇△□」への無謀な挑戦を試みたのが本小論です。鈴木大拙教授の言葉「禅は体験的であり、…体験的なものはまったく個人に属し、その人の経験を背景としなくては意義を持たぬ」(鈴木, 2022, p.7) を逆手にとり、禅の「体験」がないという「経験」を「背景」にして、何とか「意義」を持たせようと努めたのが本小論です。

2. 縦書き一行一字

私の日本語についての通俗的な知識によると、右上からの縦書き・左上からの横書き／文語・口語／標準語・共通語・方言／漢字（音読・訓読／重箱読み・湯桶読み／呉音・漢音・唐音）・万葉仮名・ひらかな・カタカナ・アルファベット・記号・絵文字／歴史的仮名遣い・新仮名遣い・ルビ付き／算用数字・漢数字・ローマ数字／楷書・行書・草書・芝居文字（勘亭流）・寄席文字・相撲文字ほか、無原則ではないまでも、自由自在を通り越し、麻のごとく乱れ、支離滅裂といっても過言でない書字方向が日本語では許されている。近年は、日本語も左から右への横書きが主流になった感があるものの、歴史的には、上から下へ、右から左への縦書きが、日本語の作法だった。江戸時代が舞台の映画やドラマに出てくる比較的大きな店の看板や暖簾に、次のような右から左への横書きの文字がよく見られる。もっとも、看板については、私の思い違いで、国語学者の屋名池誠教授によると、江戸時代には横長の看板は例外的だったようで、屋外広告の主体は暖簾だったとのこと（屋名池，2003，p.90）。

屋 州 上

図4 右からの縦書き一行一字の看板の例

こうした表記は、一見、今風とは逆さまの右から左に向かったの横書きに見える。でも少し発想を変えると、そうではなく、一行一字で改行した、立派な縦書きであり、歴史的に日本語に横書きはなかった、といいたいところなのだが、横書きの日本語は実際にはあったようで、この点については屋名池誠教授がつとに指摘している。それを知ったのは本稿の執筆準備を始めてからのことであった（屋名池，2003，pp.8-9）。ちなみに、横浜中華街には、左から右への、今では標準的な日本語の横書きと同じように、店名などが記してある飲食店や食料品店や雑貨店などが多いが、10箇所ある街の入り口には、それぞれ名前が付いた門（牌楼）が1基ずつ設置されており、東西南北に位置する門には、以下に一例を示すように、一行一字で改行の右から左への縦書きで、「門陽朝」「門雀朱」「門平延」「門武玄」と記してある（図5参照）。他の6基の牌楼にも、その名が同様に記してある。

門 陽 朝

図5 右からの縦書き一行一字で改行の名称がついた牌楼の例

このような、いわば歴史的な事例としての一行一字で改行の右から左への縦書きとは異なる理由で、もっぱら実際の視認容易性の観点から一行一字で改行の右から左への縦書きが採用されているのが、商用車の車体の進行方向に向かって右側の部分に書かれている企業名などである（図6参照）。これは、その車が走行しているとき、その右側にいる、その車の車体の右側が目に入る歩行者や車に乗っている人から見ると、車の進行に合わせて、文字が右から左に流れ、判読しやすいからであろう（図6参照）。ちなみに車の左側の車体には、右側とは逆に、

見る側からすると、左から右への通常の横書き／一行一字で改行の左から右への縦書きで同じ企業名などが記してあり、車体の右側と左側で、同じ文字の並び方が全く逆になる（図7参照）。屋名池教授は、これを「先頭からの横書き」と呼び、私とは違った見解を示されているが、ここでは立ち入らない（屋名池、2003、pp.105-110）。

産 興 三 出

図6 車体の右側の右からの一行一字で改行の縦書きの例

出 三 興 産

図7 車体の左側の左からの一行一字で改行の縦書きの例

商用車の事例とは少し異なるが、折り返し運転される電車（客車）の扉や座席の上部の天井に近い部分に張り付け／差し込み方式で表示してある縦書き横並びの停車駅名は、折り返しのたびに電車の始発駅と停車駅の順番と終着駅が入れ替わることになる。たとえば、図8に示すように、東京発・横浜行きの下り電車では、縦書きの駅名を上段の左向き矢印（←）の方向に「東京―品川―川崎―横浜」（この4駅間の地理的關係では、最も東に位置する東京が一番右で、最も西に位置する横浜が一番左）と右から左に読み、車輛の入れ替えがない横浜発・東京行きの折り返し上り電車では、同じ縦書きの駅名を、下段の右向き矢印（→）の方向に「横浜―川崎―品川―東京」と左から右に読むことになる。つまり、折り返しの電車では、縦書きであるところは通常の日本語と同じでも、右の行から左に読み進む通常の縦書きの日本語とは逆に、左の行から右方向に読むのである。

往路（←）：縦書きの駅名を右から左に読む	横 ← 川 ← 品 ← 東
復路（→）：縦書きの駅名を左から右に読む	浜 → 崎 → 川 → 京

図8 電車内における右からの縦書きと左からの縦書きの例

この電車の事例は、公共の場における表示掲示／公報・公共出版物のあり方にもつながる。今や政府を筆頭に、多くの公的機関からの社会に向けての情報が電子媒体を通じて発信提供される時代になったが、情報の受け手の側は、とりわけ受け手が高齢者など情報弱者の場合は、必ずしも情報発信提供者が想定しているような環境で暮らしているわけではなく、情報格差／情報疎外による被害を被っている可能性が少なからずある。こうした状況を現代版の相対的貧困と称してもよいであろう。禅画ならば、難解で理解不能であっても、社会的には何ら問題ないが、生活に関わる情報では、そうはいかない。

誰もが容易に入手でき、理解可能な形式と内容を備えた、わかりやすい日本語での生活関連情報の提供が求められる。真の意図をごまかしているのではないか／ことの本質を理解できていないのではないかと、とも思える国際社会では絶対に通用しないカタカナ英語（米語）の安直な多用乱用は慎むべきであろう。英語、その他の外国語の翻訳が難しいというのであれば、原語の発音に近いルビ付きでもかまわないから、外国語の表記をすべて原語で行えばよい。左からの横書きが一般化していることから、左からの横書きの外来語の日本語への導入は、さほど難しいことではなく、違和感も大きいとは思えない。日本で多用されるカタカナ外来語の多く

は、英語（米語）なので、中学生以上ならば、ひょっとすると、もっと年少者でも、英和辞典を持っているはずだから、漢字を学ぶのと同じように日本語と並行しての国際語・英語の学習の一環として、頭が柔らかいうちに英単語を学べばよいだけのことだ。もっとも、一国を代表し、弁論をもって立っているはずの政治家の中にさえ母語・母国語である日本語をまともに習得できていない人物が少なからずいる現状では、こうした提言は、あまりに現実離れしている、と一笑に付されるだろうが、それでも一言しておきたい。沙翁に倣って誤った？引用をすると、「日本語には正書法がない」「書きかたには選択肢がある」（今野、2017、p.17）ということなのである。

本小論の「本文」中でも、英語の表記（英単語を2つ）を、そのまま日本語の文章の中に1か所滑り込ませている。これら2つの英単語をかりにカタカナ表記にしても、それでその意味を理解できる人の数が大幅に増えることはないだろう。それでも次の石川九楊教授の指摘には十分注意する必要がある。「日本語の文字と文は「天」と「地」を持つ現実の世界を写しとる一つの表現として、縦に書くものとして生まれ、育ってきたもので、それを横に書くということは、ほとんど英語を縦書きにするのに等しいことです。」（石川、2013、pp.126-127）。彼ほど縦書きに強い思い入れがあるわけではないが、本稿も、当初、縦書きで始め、「投稿規定」に従い、横書きにあらためた。

ちなみに、屋名池誠教授によると、世界の主な書字方向には以下の4種類があり、日本語はそのすべてを備えているが、牛が畑を鋤き返してゆくときのように、1行目が左から右に進むなら、2行目は（飛んで左に戻るのではなく）右から左に戻り、3行目は、また折り返して右に進む「牛耕式（boustrophedon）」は、大正期の前衛詩的な試みを除いてない（屋名池、2003、pp.2-4）。

- (1) 右横書き（下へ行移り）
- (2) 左横書き（下へ行移り）
- (3) （下への）縦書き・左へ行移り
- (4) （下への）縦書き・右へ行移り

3. 「厓画無法」縦横無尽

芥川賞作家にして臨済宗妙心寺派の僧侶でもある玄侑宗久氏は、その著『仙厓 無法の禅』（PHP 研究所、2015 年）の副題に明示されているように、仙厓を「無法の禅」の人と総括する。また、出光美術館学芸員の八波浩一氏が、仙厓の作品の特徴として「禅の教えやテーマを扱った作品ばかりでなく、あまり禅とは関係ない画題も得意としていた」（八波、2022、p.179）としているように、仙厓の禅画は禅の世界に収まりきれない魅力を持っているように、私には感じ取れる。仙厓自身も、「布袋画賛」において、「世画有法／厓画無法／佛言／法本法無法」と称し、自らの絵に画法はない、としている（出光美術館、2022、p.84）。だが、この無法は無法にして無法にあらず、法を無視し、法を超えているようでいて、調和がとれており、人の心にさまざまに訴えかける力を持っている。これが「厓画」最大にして独自の魅力、あるいは仙厓の画業における自主創造の極致といえようか。仙厓とは対照的な人生を歩んだ大杉栄（1885-1923 年）の言葉「諧調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。諧調は偽りである。真はただ乱調にある。」（飛鳥井、1996、p.66）には、「厓画無法」に通じるものがあるといえ、

いかに多様な価値観が並存し拮抗する価値多元化社会の現代といえども、世の仙厓を敬信信奉する諸氏からの批判が雨霞のごとく降り注ぐことになるかもしれない。

ともあれ、その生き方において大杉の対極にあった、といってよいであろう、誰もが多少は知っているはずの3人の歴史上の人物を取り上げている「利休画賛」(出光美術館所蔵:画像3・図9参照)によって、仙厓の「無法」ぶりを検証してみよう。この縦長の禅画の下部に利休(を思わせる人物)が描かれ、その上部に漢文調縦書きの賛文が添えてある。仙厓を選んだ3人の、その道の「天下人」釈迦(紀元前7/6/5世紀?)・孔子(紀元前6-5世紀?)・利休(1522-1591年)のうち、仏道の釈迦は別にして、残りの2人、俗界で仁を説き、生涯のほとんどが「吾が道は一以って之を貫く」(吉川, 1978, p.118)放浪の旅であった孔子と、戦国大名や豪商相手に茶の湯を優雅にふるまい続けた挙句、俗界の覇者・豊臣秀吉(1537?-1598年)の逆鱗に触れ、「不屈者奴、面も見たくない。地獄のどん底に失せろ。…あの坊主奴に腹を切らせろ」(野上, 1989, pp.401, 430)と、死を賜った利休。仙厓に「天下人」のお墨付きをもらった3人の傑物の間においてさえ、このように「人さまざま」(テオプラストス(Theóphrastos), 紀元前372/369?-紀元前288/285?年)で、いつの時代であろうと、どこであろうと、人の生き方に正解はなく、生きることは難しい、ということかもしれない。

「○」「△」「□」は、それぞれ人／事物事象の個性を表わしている、と受け止めればよく、小難しく考える必要はさらさらないのでなかろうか。人間、むしろ「角」があるほうが、ときに面白く、役にも立つ。これが、「○△□」を通じて仙厓がいいたかったことではなかろうか。仙厓いわく「坐禅して人か佛になるならハ」。私の知人の中には、この「利休画賛」を見て、人物の右手には棗と茶杓が置いてあるが、利休と思しき人物の目の前に置かれた器は、抹茶茶碗などではなく、少し大きめの猪口あるいはぐい呑みで、中には般若湯が入っており、利休が秘かに隠れ酒を楽しんでいる図という剛の者もいる。確かに器の中に何が入っているかは「利休画賛」では何も明示されていない。谷崎潤一郎もいう。「われわれは見えないものを考えるには及ばぬ。見えないものは無いものであるとする。強いてその醜さを見ようとする者は、茶室の床の間へ百燭光の電燈を向けるのと同じく、そこにある美を自ら追い遣ってしまうのである。」(谷崎, 2007, p.49)。

孔子は「君子は器ならず」(吉川, 1978, p.62)というが、君子を超える人としての大きさからすると、釈迦—仲尼(孔子)—利休の順であろう。ちなみに、仙厓「三聖画賛」(出光美術館所蔵:画像4参照)の文字の部分では「神儒佛」の順に並ぶが、三聖人が鍋を囲む絵の構図は、釈迦が中央で、その右手／絵に向かって左に孔子(儒官)、左手／絵に向かって右に天神(神官)が、それぞれ配され、「三聖吸酸画賛」でも、釈迦が真ん中で、老子(紀元前6-5世紀?)と孔子がその両側に配されている。誕生長幼の順に並べると、釈迦—仲尼—利休で、こちらは絶対に動かない。文章の流れ／文脈からしても、この賛文は、一般にも解釈されているように、通常の縦書きの日本語とは逆に左から右へ読むのが自然だろう。「利休画賛」の賛文(図9参照)を右から読む場合とは文章の流れが、当然逆さまになり、文脈文意が明確になる。この画賛は、実際に書かれた順序はともかく、文脈からすると、図9に示すように明らかに一番左の行を上から下に読み、右の行へ読み進むべき、現代人にとっては異例の縦書きの日本語だ。

本章の見出しの一部「縦横無尽」に絡めての余談を1つ。最初の考案者が誰なのか、いつごろ今のかたちになったのか知らないが、クロスワード・パズルは「縦書き」と「横書き」が整然と混在し成り立つ言葉遊びの代表例。クロスワード・パズルの日本語訳に「嵌め字」「十字

語判断」等あったが、定着しなかったとは、信憑性について確信は持てないが、インターネット上の情報。手元にある一番大きな英和辞典『研究社 新英和大辞典』（竹林，2002 年，第 6 版 第 1 刷）を引くと、「crossword puzzle クロスワード（パズル）」とカタカナ英語でお茶を濁しているだけで、本来の日本語の訳語はなく、英和大辞典としては羊頭狗肉。



画像 3 仙厓「利休画賛」（出光美術館所蔵）

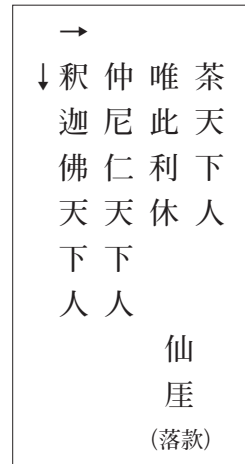


図 9 左から右への縦書き「利休画賛」賛文

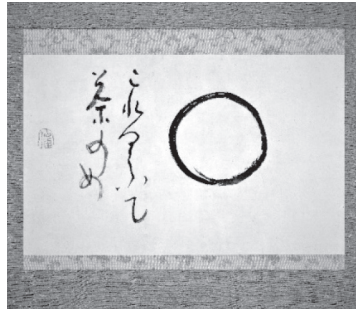


画像 4 仙厓「三聖画賛」（出光美術館所蔵）

あらぬ方向を狙っているようで、正鵠を射抜く、一筋縄ではいかないのが、仙厓さん。彼は利休を「茶天下人」といってはいるが、真意は「利休などは茶の天下人とされてはいても、喫茶の始祖・栄西禅師と比べ、小さい小さい」と私は解したい。仙厓さんには一幅紙本墨書「茶の湯の文」（1826 年：出光美術館所蔵）もあり、茶碗を集めたり、自ら茶杓を作ったりもしていた（出光美術館，2022，p.99）ようだが、彼は、もったいぶった作法にこだわる茶道など歯牙にもかけていなかったのではなかろうか。こう考えた方が仙厓さんらしくて面白い。

禅の世界における悟りの境地とされる、仙厓さん描くところの「一円相」には「一円相画賛

これくふて茶のめ」(出光美術館所蔵:画像5参照)がある。茶事の作法にこだわる者が「くふ」とか「のめ」などというぞんざいな物言いはしないであろう。こうした悟りの境地での「茶」の扱い方が卑見の傍証になる、といっっては牽強付会が過ぎるか。



画像5 仙厓「一円相画賛」(出光美術館所蔵)

さらに、臨済宗の開祖にして聖福寺ゆかりの明菴栄西(1141-1215年)には、本邦初の本格的な茶の本ともいうべき『喫茶養生記』(1214年?)があることに思いをいたすとき、「利休画賛」はますます面白くなる。ちなみに「茶の湯の文」の中ほどには次の件がある(出光美術館, 2018, p.130)。

然も中古以来其薬功之本を忘
實を失ひ華美飾り古器を好
財宝を費し各々利を貪り更に
相欺之戯具となす事嘆かしき
哉願くハ末を捨て本に帰り薬物と
覚へて服用すへき耳

全く異次元の右から左への一行一字の縦書きとしては、上州人・内村鑑三の岩波文庫版の『後世への最大遺物 デンマルク国の話』がある。本書は1946年に第1刷が発行されているが、私の手元には1970年発行の第27刷がある。この文庫本の柱は、「きがしは」に始まり、「言序るす附に版再」「序るす附に版改」「物遺大最のへ世後」「話の国クルマンデ」と続き、最後の「説解」に至るまで、全ページにわたり、右から左への一行一字で改行の縦書きである。内村鑑三については、後に再度取り上げる。

4. 「○△□」記号考

私は、社会科学の視点でものごとを見て考える暮らしを長年続けてきており、長短数度にわたるイギリス遊学を経験している。その間に、イギリスとヨーロッパの美術館や博物館に何度も足を運んだことから、絵画鑑賞眼を備えているわけではないが、「本物」の西洋美術に触れる機会が日本人の平均をほんの少し上回っているつもりです。本章は、これらを土台にしての、

いわば体験的「〇△□」の記号論的解釈試論です。

仙厓の「〇△□」には画賛はなく、少なくとも現（2023年春）時点においては、仙厓が「〇△□」について何らかの言葉を残していた、という信頼しうる資料史料が見つかった、という話を耳にしない。「1. 異端の問題提起」の冒頭で紹介した代表的な解釈のうち(1)の「悟りに至る3つの段階」説と(2)の「神・儒・仏の3大宗教／天台・真言・禅の3宗派」説は、あくまで仏教の世界での議論であろうし、「禅の境地の諸相」「比較仏教論」と言い換えてもよからうが、これらに関連して、仙厓（の時代の日本）には、おそらくキリスト教（ユダヤ教）・イスラム教・ヒンズー教に関する知識は事実上なかった、という歴史的な制約があったことを付言しておきたい。これに対して、最後の「宇宙」説は、こうした議論を一気に押し広げた気宇壮大な解釈ということになろうか。私の視点と解釈は、いずれとも異なる。

私なりの通俗的な解釈から始める。世に「右に出る者はいない」という言葉がある。また飲食店のお品書きの天ぷらや刺身や鰻の蒲焼きなどには「松」「竹」「梅」の別が、しばしばあり、値段は、通常、「松」が最上位で、次が「竹」、一番安いのが「梅」の順。これを右からの一行一字の縦書きで例示すると、図10のように並ぶ。こうしたことからすると、「禅の境地の諸相」の観点からは、右から左への「□△〇」の中で、右の「〇」が至高最善の境地となる。「□」の4つの角＝欠点が1つ取れて、角＝欠点が3つの「△」になり、最終的には角＝欠点のない完成形の円（満）に至る。

梅	竹	松	お
			品
三	五	七	書
千	千	千	き
円	円	円	

図10 飲食店のお品書きの例

試験の答案の「正誤」の判定評価方法に古くから「〇×（まるばつ）」式がある。この方式では、しばしば「〇」「×」に加えて、「△」が用いられることもある。正解正答が「〇」、正解正答とはいえないが、一定の評価に値する場合が「△」、不正解／誤答／間違いが「×」で表わされ、いうまでもなく、「〇」が「△」より高く評価され、「〇」に最高点が与えられて、「〇」は「△」の上位に位置する。ただし、全問不正解の場合の零点＝0は、「〇」に似て「〇」にあらず、その対極に位置する「×」である。

だが、これではあまりに面白くない。何しろ仙厓さんは、日本人の平均寿命が30-40年にすぎなかった江戸時代の後半に、2020（令和2）年国勢調査による日本人人口の確定数、人口動態統計の確定数（令和2年死亡数、令和元年及び令和2年出生数）を基に作成された「第23回生命表（完全生命表）」における日本人男子（81.56年）よりもはるかに長く、日本人女子（87.71年）と同じくらい長く生きた、今日でいえば、ギネス級の長寿者で、なおかつ入寂に際しての最後の言葉が「（また、小さな悟りを得たな…）死にとうない」（堀，1996，p.281）と伝わるほどの、混沌たる禅の世界で、天にあっては巨星、地にあっては巨峰、人間（じんか

ん) にあっては巨人、ともいうべき人物なのである。

その仙厓の手になる「○△□」(画像1参照)をよくご覧いただきたい。文字記号で示すと、「○」「△」「□」が重なり合う部分は全くないが、「画像1」に示す「○△□」の原画では、「△」の下部(底辺)の両端の角が、左の「□」と右の「○」の一部に、それぞれ少しずつ重なっているのを確認できる。「△」は「□」にも「○」にも通じ、「△」を介して「□」と「○」はつながっている。こう解すると、実は「一番偉い」のは、「○」ではなく、3者を結びつける「△」ということにならないだろうか。さらにいえば、欠点がある未完の「△」には、「□」にも「○」にも成長発展する可能性が秘められている。しかも「○」はころころ転がりやすく、「□」は押しやすいのに対し、「△」には安定感があり、押そうにも、つぶそうにも、力を加えにくく、横書きだろうが、縦書きだろうが、その位置は「○」と「□」の間にあって不動で揺るがない。

最近、すたれた風習のようだが、かつては死者や幽霊が頭／額の上部に白い三角形の布(天冠)を着けていた。その理由はさまざまで、巷間、それが閻魔大王に会う際の正装との説がある。仏教徒の多くにとって、死後最初にもっとも厳粛かつ重要な試練に臨むにあたって、人間にとって最も大切な部分にまとう装束には、○よりも□よりも、△がよく似合う、とされたようだ。

欧州では、フランスのタレーラン(Charles-Maurice de Talleyrand-Périgord, 1754-1838年)が「会議は踊る、されど進まず」—日本では、これよりも早い安土桃山時代の「小田原評定」が有名—と評した、と伝え聞く、ナポレオン戦争後のヨーロッパの秩序の再建と領土の分割を目的にしたウィーン会議(1814-1815年)の最後に調印された「ウィーン議定書」(1815年6月9日)によって、永世中立国であることが認められたスイスは、以来、列強の間にあって永世中立を維持し、国土は狭小でも独自の立場を堅持し続けている。そのスイスには、日本でもよく知られたマッターホルン(Matterhorn)ほか、数多くの三角にとがった頂を持つ高峰名峰がある。これがスイス人の独立不羈の毅然たる国民性の形成に影響した、といえないだろうか。

外国人の間でも日本の象徴の1つとされている扶桑第一霊峰富士は、上辺が極端に短い台形に近い三角形だ。仙厓さんにならえば「錦絵天下人」ながら、伝わるところでは、どのように考えても「福德円満」ではなかった葛飾北斎(1760?-1849年)による「富嶽三十六景」から、文化勲章受章の丸い名前の片岡球子画伯(1905-2008年)描く「赤富士」にいたるまで、著名な絵師画家が描く富士山は、「○」でも「□」でもなく、「△」か、上辺が短い「△」形に近い台形である。ただ、残念ながら、日本の山々の多くはスイス・アルプスほどには急峻ではなく、日本人の国民性も独立不羈とはとてもいえない。日本では「○」すなわち「福德円満」な人物が、しばしば褒め称えられるが、そのような人物の中に、偽善者や悪達者や食わせ者や曲者や卑怯者や卑劣漢や風見鶏などが案外多い。

また、こんな見方もできよう。「□」「△」の角を欠点と見なさずに、逆に「特長・長所・個性」と見ると、事情は全然違ってくる。「△」よりも「□」のほうが「特長・長所・個性」が多く、「○」には、角＝「特長・長所・個性」が完全に欠けている。したがって、格付けは上位から「□」「△」「○」の順になり、「福德円満」の「○」も、一皮むけば、「見掛け倒しの役立たず＝零点」ということになる。だが、ことはそう単純ではない。三角、四角…十角…百角…千角…万角…億角…兆角…と角がどんどん増えていくと、最初は「△」だったものが、ついには限りなく「○」に近付き、「○」すなわち「見掛け倒しの役立たず＝零点」と実質的には変わらなくなってしまふ。仙厓の「寒山拾得画賛」(紙本墨画：1802年)の賛文には「大聖

無聖／大智無智」とある。

隣国中国では、孔子が『論語』で「過ぎたるは猶お及ばざるがごとし」（吉川、1978、p.39）と喝破し、蘇軾は「賀歌歐陽少司致仕啓」で「大智は愚の如し」（小学館国語辞典編集、2006、第二巻、p.1210）と詠う。この孔子の言葉の趣旨が、日本では「及ばざるは過たるよりまされり」として、徳川家康の「東照公御遺訓」（久能山東照宮）に反映されている。

これを別の具体的な例で考えてみよう。スイスの国旗は赤地の中央に白十字で、三角よりも四角よりも角が多いのに対し、日本の国旗は白地に赤丸で角がない。これが国際社会において「福德円満」の象徴と見なされればよいが、「見掛け倒しの役立たず＝零点」と見なされている可能性が懸念される。スイス程度のほどのよさで、角を持っているほうが、国際社会において信用を得ることができる、といえまいか。

「×」についても一言しておきたい。かつて重罪を犯した犯罪者の処刑に洋の東西を問わず十字架が使われた。これを磔刑という。「×」を左右いずれかに45度回転させると、日本では一般に十字と考えられている「＋」になる。誰もが知っているであろう十字架にかけられた歴史上最大の人物といえば、イエス・キリスト（Jesus Christ）といって、まず間違いなからう。イエスは十字架にかけられたことによって、永遠の生命を得た。つまり「○×」式では文字通り「バツ」の「×」も、世界史的・キリスト教的に見ると、決して「バツ＝罰／劣／悪」ではなく、神聖至高なるものの象徴ということになる。ヨーロッパを中心に世界には、この「×」を図形化して国旗に用いている国がある。連合王国＝英国の国旗 Union Jack が、イングランド、スコットランド、アイルランドを象徴する3つの十字を組み合わせたものであることは、つとに有名であるが、そのほかにも、アイスランド、ギリシア、ジョージア、スイス、スウェーデン、デンマーク、ノルウエー、フィンランド、スロバキア、セルビア、ドミニカ、ジャマイカなど、数多い。

「△」から「□」さらには「○」への接近近似に関連して、組織の成長発展に関わる「多角化」に論及しておこう。20世紀後半、とりわけ20世紀末あたりから猛烈な勢いで進む企業経営の多角化・ボーダーレス化と一体化した国際化・多国籍化・グローバル化の急激な進展である。こうした動きは、間違いなく国内市場の狭隘化に直面した大企業・大資本が、市場の拡大を通じての自らの成長発展と利潤極大化を目指したことから生じたものであり、少数の企業は所期の目的を達成したようだが、その半面で多くの企業が、不可避的に巨大な危険に巻き込まれ、新種未知の危険に遭遇して、姿を消していった。つまり地球規模の経済体制の大変革ともいうべき「グローバル化」は諸刃の剣でもあったのだ。時代を問わず、成長発展の過程は、大きな変動変化の過程にほかならず、それが安定的に推移していく保証は今のところない。

5. 「○△□」視覚考

「○△□」（画像1参照）を印刷物で見ると、□の墨色が最も薄く、「△」と「○」はほぼ同じ濃さに見える。「△」と「□」「○」が重なる部分のうち、「△」と「□」が重なる部分は、墨色の濃淡の差から、まず「□」が描かれ、その後で「△」が描き加えられたように見える。「△」と「○」が重なる部分についても、墨の重なり具合から、「○」が先、「△」が後のように見える。つまり「□」と「○」の先後は別にして、3つの図形＝記号の中では、「△」が、他の2つを描いた後、最後に描き加えられ、他の2つの上に乗るかたちで、「□」と「○」の

2つを抑えて、「○△□」が完成した、と考えられる。

ところが、「○△□」の本物を出光美術館でガラス板越しに実際に目にすると、墨の濃淡と墨の重なり具合から、以下の可能性が考えられるようになった。

- (1) 「□」「△」「○」の順
- (2) 「○」「△」「□」の順
- (3) 「□」「○」「△」の順
- (4) 「○」「□」「△」の順
- (5) 「△」「○」「□」の順
- (6) 「△」「□」「○」の順

この順番は、「筆墨表現」の専門家諸氏にとっては、非常に重要な問題であり、エックス線照射などで簡単に判別できるであろうし、おそらくすでに判別されているだろうから、ここではこれ以上立ち入らない。ここでは、運転免許を取得できる程度の視力があれば、誰にでもわかるはずの次の6点を問題にしたい。こう考えると、「○△□」の中での「△」の優位は、もはや揺るぎないものとなる。

- (1) 「△」の底辺の左右2つの角が「□」と「○」にしっかり食い込んでいる。つまり「△」は、「○」にとって、「喉に刺さった小骨」「獅子身中の虫」、あるいはカエサルを「○」とし、アントニーを「□」とすれば、「美しい薔薇には棘がある (No rose without a thorn)」の伝で、両者を手玉に取ったクレオパトラのような存在こそ「△」といえようか。
- (2) 「△」の頂点をよく見ると、わずかではあるが、「□」「○」より高い位置にあり、明らかに左辺の後で書かれた／描かれたに違いない「△」の右辺の「打ち込み」が左辺の最上部を突き抜けるように書かれている／描かれている。これによって、仙厓は「○△□」の上下優劣関係を、きわめて巧妙な手法で暗示している。
- (3) 「△」の頂点を富士山頂とすれば、その山頂に南面して（禅画を見ている者のほうを向いて）立つと、左手すなわち東側に「○」すなわち日本の象徴でもある旭日昇天＝ご来光を、右手すなわち西側には「□」すなわち四方平和な大海＝太平洋を一望することができる。「△」の頂点は、世界を展望俯瞰するに絶好の位置である。
- (4) 「△」の底辺＝最下部は「○」「□」の最下部よりも上にあり、「○」の最下部は「△」「□」の最下部よりも下にある。
- (5) もう1つ決定打。一般的には玉座、日本では高御座、もちろん、もっとも尊いお方専用のお席のことである。この席は、その場の右でも左でもなく、中央にあるのが、知るかぎりでの古今東西の決まりごと。「○△□」で常に真ん中の玉座・高御座を占めているのは「△」である。「○」「□」は、いってみれば、左輔右弼。民主的な議会でも、議長の席は中央と決まっている。下世話になるが、国技を僭称する大相撲の横綱土俵入りでも、太刀持ち（横綱の右手側）と露払い（同左手側）を従えて、番付最高位の横綱は中央。もっとも、中央にいても、常に右顧左眄し、腰の据わらない人物は古今東西多いことからすると、中央必ずしも最高最善とはいえないかもしれない。
- (6) 旧友・松村哲夫君の説も若干補足して紹介しておきたい。「○△□」は宅配／持ち帰りのピザ・パイを想起させる。ピザの形状は通常「○」く一私（真屋）は1980年代半ばにナポリを訪れたとき、喫茶店と居酒屋の中間的な店バールで、小さな長方形のピザを昼食代わりに口にした記憶があるが一、それを配達するときは「□」な紙箱に入れ、食べると

きには、4 切れ、6 切れ、8 切れなど、「△」に近いかたちに小さく切る。つまりピザが食べ物としての頂点に到達し、「鼻の下」の楽しみを私たちに与えてくれるのは、「○」から「△」に変化したときであり、ピザ・パイによっても「△」の優位性を確認できる。「○△□」を名乗るピザの宅配店が世界中に出現すれば、実に愉快だ。

ちなみに、セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906 年) は、「自然は、円筒、球体、円錐をつかって処理すること」(ガスケ, 2021, p.242) といっている。私は、これに刺激を受け、彼の発想を「○△□」と絡め、次のように発展させた。

- (1) 球は、どこから見ても○に見える。
- (2) 円筒は、○にも□にも見える。
- (3) 円錐は、○にも△にも見える。
- (4) 三角柱は、△にも□にも見える。
- (5) 三角錐は、どこから見ても△に見える。
- (6) 四角柱は、どこから見ても□に見える。
- (7) 四角錐は、□にも△にも見える。

こうした物体の特性を総合的にとらえたのが、少し乱暴な議論になりそうだが、パブロ・ピカソ (Pablo Picasso, 1881-1973 年) やジョルジュ・ブラック (Georges Braque, 1882-1963 年) ほかによって 20 世紀初めにパリで展開されたキュビズム (cubisme / cubism: 立体派・立体主義) ということになるのではなかろうか。そうであるとすれば、仙厓は、ピカソやブラックの先覚者ということになる。

ところで、今どきの若者に「○△□」を見せると、「オデン」と即答する強者がいるとか。こうした現象を、常套句の「今どきの若い者は…」という枕を使って嘆く人たちもいるようだが、この種の若者は自覚なくして仙厓の境地に達しているのかもしれない。東京・浅草橋にあるおでん居酒屋「まる さんかく しかく ○△□」のご亭主によると、おでんの「○△□」は、○=大根、△=蒟蒻、□=はんぺん、となる(画像 6 参照)。子のたまわく「後生畏るべし」(吉川, 1978, p.313)。



画像 6 浅草橋「まるさんかくしかく ○△□」のおでん
(真屋が並び変えて撮影, 2022 年 11 月)

厳密に調べたわけではないが、「オデン (御田)」の語源は豆腐の串焼き「田楽豆腐」との説(小学館国語辞典編集部, 2006, 第 1 巻, p.816)があり、仙厓の時代には、田楽だけでなく、すでに「オデン」が存在していたようだ。当時の「オデン」のネタ (具材) が何であったかはさておき、「□」を豆腐、「△」を蒟蒻、「○」を大根に、それぞれ見立てても、あながち的外

れとはいえまい。2023年の今から丁度30年前には本邦初ではなかったかもしれないが、非常に珍しかった横組みの国語辞典『辞林21』には、「おでん【御田】[もとは女房詞。「でん」は「田楽（でんがく）」からという] ①蒟蒻こんやく・里芋・大根・竹輪ちくわなどを醤油味で煮込んだ料理。…」(松村ほか, 1993, p.297)とある。

人間が生きていくための不可欠の要素として最上位に位置づけられる「食」に、仙厓が大きな関心を寄せていたことは、彼の画賛「これくふて茶のめ」「楽しみハ花の下より鼻の下」「三聖画賛」(出光美術館所蔵)などからも知れ、一円相すなわち「○」は「餅／団子／饅頭」「(輪切りの)大根／沢庵漬け」はては「(ゆで)卵」の類と解してよく、「□△○」すなわち「オデン」説には、哲学的・科学的・学術的とはいえないまでも、即物的・直感的・風俗的な根拠がある、といえよう。

1つの事象の意味合いが見方次第で変わることは多々ある。日本人の命を支え、民族性を培い、文化を育んできた、ともいえる「稲」の「色合いは種類によりてさまざまなり」(柳田, 2010, p.7)とは、いい得て妙。それどころか、人間の営為の結果成果の評価は、ほとんどすべて、その基準や方法などによって、その論理的な妥当性や整合性を別にすれば、異なってくる、といって過言でない。

しかし、論理的な妥当性や整合性を徹底的に追究しなければならない問題もある。たとえば、極端な場合には、民族間の国境を越えての集団的な殺人行為が、義戦や聖戦などの名のもとに、ときに人間を救うはずの宗教までも絡んで正当化され美化さえされて、国内外で多くの宗教戦争による集団的な殺人行為が行われてきた。人類史上初めて殺人と破壊を目的にして、広島(1945年8月6日)と長崎(1945年8月9日)に投下された原子爆弾でさえ、戦争を早く終結させるため／平和を1日も早く回復するため、などとその正当性を主張する人たちが過去にただけでなく、今もいる。

一方からすると、義戦や聖戦であっても、他方にとっては、虐殺や蹂躪や侵略や弾圧になる。だが、この種の価値観の多様性・相対性は、唯一無二にして有限なるがゆえに人命は何物にも代えがたく、不可侵性があるとすれば、絶対に認めるわけにはいかない。価値の多元化が進んでいる21世紀の地球社会といえども、目的が手段を正当化するわけではない。直近では、2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻がその典型だ。悟りの境地に達し、奇跡ともいえる長寿に恵まれた仙厓でさえ、最後に「死にとうない」といい残した。私はこれを彼の本音と考えたい。

戦争による理不尽で不本意な死などあってはならない。にもかかわらず、日本のような小さな島国で、軍事力を増強すれば、仮想敵国を威圧でき、戦争を抑止して、国土を守る、などと本気で考えている人たちがいるとすれば、戦争＝殺人を職業にしている組織か、兵器を生産し、軍隊に売る事業を営んでいる組織に属する人たちだけのはずなのだが、必ずしもそうでなさそうところが不思議でならない。何かの間違いで、核爆弾の3発、否、1発でもこの小さな島国に落ちれば、一巻ならぬ一国の終わりだ。にもかかわらず、防衛関係費の増額に血道を上げ、暴力への暴力での対抗を是とする人たちが権力の座を占めていることの不思議。いかに国際法において許されており、合法的と強弁し、正当防衛を主張しようと、軍隊は、その本質究極において殺人機構以外の何物でもない。宗教家にしてチベット亡命政府の長で、ノーベル平和賞受賞者のダライ・ラマ14世(Tenzin Gyatso: 丹增嘉措)は、次のように語っている。「問題や意見の不一致に直面したら、いまの私たちは対話を通じて解決に達しなければなりま

せん。対話が唯一の適切な手法です。」(ダライ・ラマ 14 世, 2008, p.21)。ところが非常に残念なことに、母語・母国語で書かれた、正しくはおそらく代筆してもらったであろう原稿をまともに読み上げることさえできず、論理的な対話などは夢のまた夢、という知的水準の首相が何人も続く、不思議な島国が極東にある。

6. 「〇△□」上州人考

仙厓の「〇△□」と高崎の居酒屋「〇△□」にこじつけて若干補足しておきたい。高崎には、仙厓とは臨済宗と黄檗宗の違いがあるものの、達磨(5?6?世紀)を祖とする同じ禅宗の「縁起だるま」で名高い黄檗宗少林山達磨寺がある。明治時代までの歴史的な律令体制下での五畿七道六十八か国の中で国名に「上」の字を含むのは、「上野(こうずけ)」と「上総(かずさ)」の2か国だけで、「上州」といえば、「上野」を指す。地図の上でも「上野」は「上総」の上＝北に位置する。高崎は、この上州(今の群馬県)にあり、古くから要衝の地とされ、草津、伊香保、水上、四万、万座など、名湯が多いことも古くから知られている。さらに、世界遺産に認定された、女性が主役＝生産者だった「富岡製糸場と絹産業遺産群」を今に残し、「〇△□」が宇宙を表わすとするれば、日本人女性初の宇宙飛行士・向井千秋博士を生んだのが上州だったのも何かの因縁かもしれない。

ところで、三角形といえば、初等幾何学で教わる／苦しめられたピタゴラスの定理(Pythagorean theorem: 三平方の定理)を思い浮かべる人が多いかもしれないが、本稿執筆の過程で私の頭に最初に浮かんだのは、旧友・松村哲夫君が上州人であることから、上州には有名な「三角野郎」がいたはず、という記憶だった。耳にしなくなってずいぶん時間が経過した感がある上州の民謡俗謡とされる「八木節」の冒頭に「三角野郎」が登場する。あらためて調べてみると、「八木節」発祥の地は、下野の宿場・八木宿らしく、成立は明治・大正期で、その後、栃木・群馬両県(両毛地域)でこの歌が歌われるようになったとか(栃木県足利市ホームページ)。歌詞は実にさまざまなのだが、私の記憶にある、おそらく上州版の歌い出しはこうだ。

ハァーまでも出ました三角野郎が
四角四面の櫓の上で
音頭取るとはお恐れながら
国の訛りや言葉の違いお許しなさればオオイサネー

このように、「八木節」は、地域を挙げての毎年の一大行事・盆踊りの音頭で、その音頭を今年も取らせていただき、場を仕切らせていただくのは、「三角野郎」といわれる、この私めでございますが、平にご容赦ください、という断りから始まる。この「三角野郎」こそ一大行事の主役であり、「四角四面の櫓」の舞台はその引き立て役でしかない。しかも、これをさらに盛り上げるのが丸い樽の太鼓や丸い鉦。三角(△)、四角(□)、丸(○)ときて、人を唯一表わすのは三角。この「八木節」の歌い出しは、西欧の近世における思想的な基調ともされる人間中心主義(anthropocentrism)にも通じる、といっちはうがちすぎかもしれないが、こうなると、一番偉いのは少なくとも3つの欠点を持った「△」野郎＝人間で、人間が作った「□」な舞台も「○」い楽器も、「△」野郎の添え物になる。

群馬県人ならば、みんな知っている（といわれる）「上毛かるた」（群馬県、2021）の「ら」の読み札「雷と空風／義理人情」を念頭に置いて、「三角野郎」に関する私見を一応述べておく。「三角野郎」とは、義理と人情に欠け、俠気売り物にする男の風上にも置けないような所業は日常茶飯で、しょっちゅう周囲に迷惑をかけ、顰蹙を買い、大恥を搔いても、本人は、一向に気に病むことがなく、反省はしても、その場限りの口先だけ、それでいて、なぜか周囲からあまり憎まれもせず、嫌われもしない、三拍子も四拍子もそろった、並外れた放蕩無頼の徒で、とりわけ、上州では、名物の空っ風に吹かれて素寒貧の三下奴を指し、働き者／しっかり者の嬬の尻に日夜敷かれっぱなしの、愛すべき、ぐうたら男の別称にして蔑称に他ならない。

「三角野郎」は、1人の俳優が演じた最長映画シリーズとしてギネス世界記録に認定された「男はつらいよ」シリーズの主演で、国民栄誉賞を追贈された渥美清が演じた、20世紀後半の日本の銀幕における最大の人気者の1人だった「フーテンの寅」こと車寅次郎に、かなりの部分が重なる。「三角野郎」にとっては、盆踊りの櫓の上で、「八木節」の音頭を取ることで、ほとんど唯一の生き甲斐であり、男伊達の晴れ舞台。そんな土地柄にもかかわらず、ある時期、上州から何人も内閣総理大臣が出ている。上州畏るべし。とはいえ、上州人が、以下に紹介するように、欺かれやすい人々であるとしても、さすがにこれらのお偉方を八木節の一節に今後加えることは、まずなかろう。

人間臭い「八木節」に似合う上州の英雄は、何と云っても、関所破りを犯した、お尋ね者の博徒、今風にいえば、指名手配中の反社会的勢力の親玉・国定忠治こと長岡忠次郎だろう。この人物の最後は、因果応報、惨めで哀れだが、価値観やものの見方が少なくとも表面的には大きく変わった明治維新以後、かつての極悪人・大罪人が、弱きを助け、強きをくじく、任侠の徒の代表的人物として、浪曲や講談や歌謡曲や芝居や映画や小説などに取り上げられるほどの大変貌を遂げている。それでも、おそらく上州以外の地で、とりわけ若い世代で、今、その名を知る人はほとんどいないだろう。興味があれば、1927年に3部作として製作された伊藤大輔監督・大河内傳次郎主演による無声映画で、フィルムが一部残っている、名作傑作の誉れ高い「忠治旅日記」を鑑賞してください。併せて、日本最古とされる映画会社・日本活動写真株式会社（株）の後身・日活株式会社が1954年に映画製作再開第1作として公開した滝沢英輔監督・辰巳柳太郎主演の「国定忠治」を観ると、伝説化された人物の出鱈目さ加減がある程度わかる。

「八木節」に歌われる国定忠治が「無頼の徒」であったのに対し、知性と教養を備えた、気骨ある江戸生まれの「上州人」にして『代表的日本人』の著者であり、自身が国際的日本人の代表でもあった、無教会主義者・内村鑑三（1861-1930年）は、気鋭の批評家・随筆家の若松英輔によって「悲しみの使徒」とされる。内村は、「教育（ニ関スル）勅語」の奉読式において低頭奉拝をためらい、俗世間から「不敬漢／国賊」と罵声を浴びせられたが、敬虔なキリスト教徒であった（若松、2020, pp.70-73）。その彼には、韻を踏まない破格の七言絶句「上州人」（若松、2020, pp.3-4：原文は縦書き）がある。

上州無智亦無才	上州〔人〕は無智亦た無才にして
剛毅木訥易被欺	剛毅木訥にして欺かれ易し
唯以正直対万人	唯正直を以て万人に対し
至誠依神期勝利	至誠神に依って勝利を期す

このように内村鑑三は「上州人」を冷静に分析する一方で、「上州人」に温かい眼差しを向けており、縦書きルビ付きの「上毛かるた」の「こ」の読み札は「心の燈台／内村鑑三」と地元でも評価されているが、世俗的な意味での「福德円満」な「○」い宗教家というよりも、自身が「剛毅朴訥」で「唯正直を以て万人」に接する上州人であったことから、人によっては彼を固くて尖った「△」形のような人物と見なした可能性は多分にある。それかあらぬか、旧友・松村君によると、内村鑑三が何をした人なのかは、地元の人たちにあまり知られていないらしい。「上毛かるた」の読み札も取り札も、1947年に初版が発行されて以来、初版の「ち」の読み札「力をあわせる百六十万」の県人口「百六十万」が、1993年に「二百万」に変更された以外変わっていない。

7. 「○△□」大学人考

(1) 金平糖と理工学系の発想

日本経済が高度成長期に差し掛かるころからだろうか、ある時期までは駄菓子の代表の1つだった金平糖を身近で目にすることが、いつの間にかなくなり、口にすることもなくなった。金平糖は、大きさに大小があり、色も何種類もあって、球すなわち「○」から三角錐すなわち「△」の角が生えたようなかたちをしており、とても面白い。この金平糖に、2人の理工系の大学人が注目し、大学における研究と教育に関係する示唆に富む非常に興味深い「金平糖論」を展開していることを、私は20年ばかり前に知り、「○△□」と「金平糖」はまんざら無縁ではない、と考えるようになった。

現在では製法がすっかり変わっているはずだが、古くは「胡麻一粒を種」(井原, 2009, p.383)として、多くの人たちの視覚に訴えて、興味をそそり、究極的には「鼻の下の楽しみ」になる金平糖の、あの形状が作られた。明治・大正・昭和期の物理学者で、夏目漱石にも師事した随筆家でもあった、東京帝國大學教授の寺田寅彦博士は、随筆「金平糖」(寺田, 1927, pp.140-141)の中で、ミクロの視点から、その魅力を次のように述べている。「金平糖のできあがる過程が実に不思議なものである。…純良な砂糖に少量の水を加えて鍋の中で溶かしてどろどろした液体とする。それに金平糖の心核となるべき芥子粒を入れて杓子で攪拌し、しゃくい上げしゃくい上げしていると自然にできあがる…。金平糖のほうでは、…によきによきと角を出して生長するのである。」こうして、彼は次のように論を進めていく。「金平糖の生成に関する物理学的研究は、その根本において、将来物理学全般にわたっての基礎知識として重要なべきあるものに必然的に連関して来るものといってもよい。」一見、金平糖は駄菓子のようなだが、元をたどれば、ポルトガルからの貴重な舶来品で、単なる駄菓子ではない。京都には金平糖専門の老舗があり、箱入りの金平糖が贈答品として使われている。この箱を金平糖本体と一体化したものともみなすと、宅配ピザ同様、金平糖は「○△□」を文字通り体現している。

寺田寅彦は、また金平糖の形状について、きっと多くの読者の関心を引くに違いない観察結果を前掲の随筆の中で次のように書き残している。「金平糖の角の数がほぼ一定している。その数を決定する因子がなんであるか、これは一つのきわめて興味ある問題である。」(寺田, 2011, pp.141-142)。この問題に関連する研究が東北大学大学院理学研究科グループによってなされている、との記事が『科学新聞』第3118号(2006年10月27日)に掲載されている。

これに対し、都市計画が専門の元日本大学総長・理事長の小嶋勝衛博士が、日本最大級の規

模を誇る総合大学の目指すべき姿として、21世紀初頭に提示したのが、マクロの視点からの金平糖型研究教育機関としての大学像である。そこでは、多様な分野の学部学科・大学院研究科とそれらに所属する教職員と学生・大学院生などが、金平糖の突起よろしく、それぞれ自主性と個性を発揮し、分野を越えて連携交流しつつ切磋琢磨して、さまざまな課題に挑戦し、未来を創造していく姿が次のように力強く簡潔に展望されていた。要約し紹介する：歴史と伝統を誇る大学の巨大なスケール・メリットを生かし、時代を読み、先取りする感性鋭い学生を育て、コンペイ糖の角のごとく、そこかしこにパワーあふれる闘う大学であり、学生たちには、社会に出てからは凛とした人生を送ってもらいたい（小嶋，2006，pp.5-6）。

これが実現すれば、実に素晴らしいが、突起の形状と大きさのバランスが崩れ、自主創造の方向性を間違えると、ただ単に大きいだけの突起が目立たない金平糖、あるいは非常に歪なかたちの誰も手を出さない金平糖になってしまう。あるいは口に含むと甘いだけで、虫菌の原因にもなる金平糖になってしまう。

その製法に従うと、金平糖の角の数は、自ずとほぼ一定しているのに対し、金平糖型の総合大学は、その「心核」ともいうべき明確な理念理想を定め、金平糖が内発的に成長する条件・環境を整備しなくてはならない。しかも角の間のバランスが取れていなくては金平糖とはいえない。大学教育を通しての人間形成という視点からすれば、昨今の産学官共同や偏差値や資格試験合格率や授業そっちのけでのインターンシップ／就職活動や競技スポーツなどにおける大学間の競争／大学の格付け、教室や図書館などにいる時間よりもアルバイトの時間のほうが長い大学生活、大学院進学率の低さ、奨学金の返済に四苦八苦の卒業後の生活などは、大学進学率の高位平準化とは裏腹に、大学教育の劣化・貧困化の象徴といってよからう（川崎，2007，pp.100-102）。

意外なところで金平糖が極限状態における命の綱の食料として準備されていることを最近知り、大変驚いた。「防衛省仕様書改正票 小形乾パン（BISCUIT, SURVIVAL）制定 昭和52.3.30 改正 平成30.6.26 6.N.5002G 附属書A（規定）金平糖」に、「金平糖」に関する細かな規定が記載されている。核兵器や細菌兵器などについては詳しい、巷の軍備増強論者の中にも、このことを知る人は、おそらくあまりいないだろう。ミサイルや戦闘機も大切だろうが、いかなる攻撃にも耐えうる覆いで日本の領土と領海を包み込まなければ、兵器に対して兵器で対応して日本を守ることなどできっこないし、食料さえ満足に自給できない国が、21世紀における戦争を勝ち抜き、生き延びることなど、夢のまた夢でしかない。むろん、かつての「欲しがりません、勝つまでは」の精神論で戦った結果がどうであったかぐらいは、歴史に関心がない人たちでも知っているはずだ。そもそも腹が減っては、戦はできない。缶詰の非常食・保存食には金平糖入りの乾パンがあるそうだが、乾パンや金平糖をかじって飢えをしのがなければならないような事態を招いてはならない。

（2）金平糖と人文社会科学系の発想

「心核」がある金平糖には、寺田寅彦に先立って、江戸時代の浮世草子作家・俳諧師の井原西鶴も多大な関心を寄せ、その著『日本永代蔵』で「胡麻一粒を種として、このごとくなれる」（井原，2009，p.383）と述べている。古来「種／心核」なくして、金平糖は作れないのである。これを「金平糖型の研究教育機関としての大学像」にあてはめて考えると、金平糖にとっての「種／心核」は、大学における「知性」と「良識」ということになるだろうか。経済学者アルフレッ

ド・マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1922 年) のケンブリッジ大学教授就任講義の中での言葉を借りると、「冷静な頭脳」と「温かい心情」(マーシャル, 1991, p.31)に通じる, といつてよからう。彼は, 論文「経済騎士道の社会的可能性」の中で次のようにも述べている。「いかに大きな富であっても, それが, ごまかしや, 情報の操作や, 詐欺的な取引や, 悪意をもってするライバルの破滅によって得られたものであれば, 社会的な成功へのパスポートにはならないでしょう。…卑劣な仕方では得られた富は, そのような人間が主としてそのために富をあがめる, 社会的な栄誉を生むことを妨げ, また, 高級な主義においては欠けるところがあるとしても, 才能と常識をもつ人々の好意を得ることを妨げるでしょう。」(マーシャル, 1991, pp.155-156)。

ところで, 優に 1 世紀を超える歴史を誇る, 名前からしても大規模な, さる総合大学が, 理知的・民主的な大学運営の対極に位置する, おそらく古典や名著など繙くことはおろか, そのようなものが世に存在することすら知らず, まともな読書体験など皆無の競技スポーツ系・体育会系の理事たちを中心にした独善的管理体制のもとで, 大学としての自主創造の方向性を見誤り, 10 年以上にわたって大学の土台ともいふべき研究環境の整備をおざなりにしていた。その間, 空疎で内容を伴わず, 科学的な根拠に欠け, 消費者庁に訴えられかねない, フーテンの寅さんの啖呵売よろしく, 「日本一教育力のある大学実現」を謳い, 競技スポーツの振興を掲げた少数のアスリートのためのスポーツ科学部や大学が機能麻痺に陥ろうとしている危機的状況下で最適の対応策を策定提言できない構成員からなる危機管理学部まで新設していた。しかも, その背後で不正な金銭の授受が行われていたことが, 白日の下に晒され, 大学の社会的な評価の失墜を招いてしまった。この大学では, 英語はおろか母語・母国語である日本語さえ怪しそうな理事長が, 折にふれカタカナ英語を使って「学生ファースト」を声高に叫んでいたが, 皮肉なことに, ファーストはファーストでも, 一連の歪な大学運営の最初にして最大の被害者が学生諸君で, 多くの卒業生・教職員ほかの関係者が, 恥ずかしく, つらい思いをさせられることになった。

大学理事長が体育会系であっても一向にかまわないし, 体育会系であれば, 体力は人一倍あるだろうし, 大学運営において明朗活発公明正大なことが期待される。加えて, 中身はともあれ, いく分なりとも大学人らしい知的な雰囲気を漂わせていれば, いっそう好ましい。人生における楽しみは人さまざまでかまわないようなものだが, 大学の理事長ともなれば, パチンコ店に出入りする姿よりも, せめて大学運営にも一家言を有するらしい, ご自身と同窓の直木賞作家・林真理子さんの名を世に知らしめた『ルンルンを買っておうちに帰ろう』を, 帰宅途次に神田神保町あたりの古書店で手にしている姿を, 大学の PR 用画像動画でもよいから, 社会に向けて流すくらいであってほしかった。かなり目立つ相撲で鍛えた体躯に強面の顔貌と「ルンルン」の組み合わせは, 学び心と遊び心の極致として歴史に残る名場面になったかもしれない。

英文学者で大学教員, 芥川賞受賞者にして文化勲章受章者, 作家・文芸評論家・翻訳家・随筆家でもあった丸谷才一 (1925-2012 年) は, 「古典と別れたとき, 知識人は教養のある指導者ではなくなる」(丸谷, 2011, p.217) といっている。これに対し, 件の理事長は, まわし 1 本で「押さば押せ, 引かば押せ」が極意の小さな「○」い土俵に立ち, 「○」いちゃんこ鍋を, 「○」く車座になって囲み, 「○」い井鉢で活力源を補給する世界で青春を燃やしたことをほとんど唯一のよりどころにして, 世の中を泳いでこられたようにお見受けする。もともと知識人

とも教養人ともいえないお方を大学理事長に担ぐほうも担ぐほうなら、担がれたにせよ、わずかなりとも良識があれば、「学問の府」とも「知の拠点」ともされる総合大学の理事長に自らが適しているかどうかくらい判断できそうなものだが、名誉と権力と報酬が目くらんだのか、その地位にお就きになり、よほど居心地がよろしかったのか、長期にわたりその地位に固執された挙句、心ある人たちが予期していたように、ある日突然、得意の絶頂から奈落の底へ転落した。この悲喜劇を、シェイクスピアならば、どんな戯曲にしてみせてくれるだろうか。

上記のマーシャルの言葉を、きっと知らなかったであろう人たちとして、次の方がたを挙げたい：(1) 件の某大学の理事長はじめ理事諸氏や彼らと一心同体であったであろう学長や副学長諸氏。(2) 多数のコロナ禍による生活苦・経営苦に喘ぐ人たちに対しては、規制と要請を柱にした場当たりの対応のみで本来的・政策的な対応を事実上何ら行わず、2021年に開催された商業化の極みともいえる、気が遠くなるほどの公費を投じての国家的な世紀の一大浪費事業＝東京五輪・パラリンピックをめぐる政界・経済界に官公庁もマス・メディアも絡んでの茶番に続く醜聞で、本来、健全な心身の育成に役立つはずのスポーツが、そのあり方次第では、いかに不健全であるかを衆人の目に曝すことになった人たち。

こう考えると、オリンピックの日本語訳「五輪」が、その理念とは大違いで、何やら「見掛け倒しの役立たず」の5つの「〇」に見えてくるから不思議だ。健全な精神は、必ずしも健全頑健な肉体に宿るわけではなく、スポーツは、しばしば肉体も精神も蝕む。スポーツの種類と取り組み方によっては、かけがえのない命を失うことさえまある。肉体と精神は教育によって均衡を保つことができるのだが、教育界も今や怪しい。

元大学教員で中国文学者の高島俊男(1937-2021年)によると、「今の自分たちのありよう・考えかただけを、人類の唯一のそれと思っている人」を「無知」ということになる(高島, 2008, p.164)。また柳田国男は、1世紀近く前の1928年に「無学な者でも間に合うほどに、けっして現在の政治は手軽ではない」(柳田, 1979, p.144)と喝破している。にもかかわらず、昨今の政治家諸氏の中には、偏差値上は秀才でも、無学無教養で厚顔無恥、しかも慢性的な健忘症を患っている人物が多すぎる。この柳田の言が、大学運営についてもあてはまることを、件の某大学理事長は立証してくれた。無知に勝る傲慢はない。

『共産主義批判の常識』(新潮社, 1949年初版: 1954年文庫版)で一世を風靡した経済学者で慶應義塾長にして文化勲章受章者でもあった小泉信三(1888-1966年)は、次のように述べている。「本を読んで物を考えた人と、まったく読書をしないものとは、明らかに顔が違う。…偉大なる作家思想家の大著を潜心熟読することは、人を別人たらしめる。」(小泉, 1966, pp.18-19)。さらに、老子いわく「天網は恢恢たり、疏なるも失わず」(池田, 2017, p.848)。

(3) 大学人の「心核」

言葉の専門家の林真理子さんが、大学理事長「就任記者会見」で大学職員を「サラリーマン」と表現したことで、大学の職員から匿名のなぜ実名にしなかったのか、私には理解困難な一手紙による抗議を受け、「失礼をわびるとともに、とてもうれしく感じました」(林, 2022, p.1)と、「理事長就任挨拶」で述べられているのに、私はいささか面食らった。件の職員の抗議の真意も林さんが何についてわびたのかも、『日本大学学報』第1078号に掲載されている前掲の「挨拶」の文言からはよくわからない。かりに何か過ちを犯したり、失言をしたりして、それを率直に認めてわびることは、地位の上下を問わず当然のこととして、林さんが自ら推敲を

重ねられたであろう「挨拶」に目を通した私は、林さんの文筆家・文化人としての、ひいては大学人としての資質に少し危惧の念を抱かざるをえなくなった。知識人として大学経営の頂点に登りつめた林さんが、いかに理事長就任直後のこととてご多忙でお疲れになられていたとしても、男女共同参画時代の今、「サラリーマン」などという女性差別にもつながりかねないカタカナ英語を平気で口にする、社会的感性の鈍さと知的感性の貧しさに、大袈裟でなく私は驚愕した。

しかも理事長としての最初の非常に重要な学内外に向けての所信表明「理事長就任挨拶」は、まさか事務局が用意したものではないはずなのだが、志の高さも、心に響く語句も、文章の美しさも、ないない尽くしの代物で、新理事長としての清新で明確な改革の指針にいたっては微塵も明示されていない。しかも、実質的な結びの言葉にいたっては、法に触れる行為があり失脚した前任者の手垢にまみれた陳腐な「学生ファースト」なのだから、あきれるほかない。少なくとも彼女の「理事長就任挨拶」からは、大学人となったはずの彼女の知性も機知も見出すことは難しかった。大学改革の「心核」として学内外から大きな期待を寄せられているお方が、いつまでも「ルンルン」では、学生諸君が一番こ「○」し、かわいそうだ。林さんには日本大学のような巨大教育組織の運営に携わった経験はないはずだし、生粋の大学教職員・研究者としての経歴もなく、大企業を経営したこともないはずだ。林さんに期待できるとすれば、作家の最大最強の武器ともいえる言葉の力／言語感覚の豊かさによって、学生諸君・教職員諸氏ほかの大学関係者を感奮興起させること、これ以外にないであろう。それが、理事長就任から半年経過した現時点（2023年3月）においてもまったくみられない。林さんは当然で存じのはずだが、江戸時代中期の俳人・滝野瓢水（1684-1762年）に「手に取るなやはり野に置け蓮華草」の句があることをふと思い出した。

知識人のはずの林さんが、「理事長就任挨拶」で元総理から「頑張ってね」と声をかけられたことを誇らしげに披露されていることも心配だ。この声掛けには実質的な意味内容は皆無だ。大方の人間は自分なりに頑張っている。問題は頑張りが適切かどうか、といったところだろう。EBMの第一人者グレイ（Sir Muir Gray）は、「正しいことを正しく行っているか？」（Gray, 2001, p.45）と私たちに問いかけている。言葉を知らない乳飲み子でもお腹が空けば、乳を欲しがり、力の限り泣いて訴える。林さんに求められるのは、明確な大学像の提示であり、その実現に向けての方法と、何よりもその成果です。「頑張ってね」程度の語彙力しかない元総理と彼からの無意味な声掛けを就任挨拶で得意げに語る大学理事長。大政翼賛会に関わりながらも、第2次世界大戦敗戦後、文化勲章を受章した作家の大佛次郎（1897-1973年）が幕末動乱の世に送り出し、暗い谷間の時代に国民的な人気を博した、理想主義者・人道主義者ともいえる、仙厓さんとは異なる次元の自由人・鞍馬天狗が、「日本の夜明けは近い」と杉作少年に語ってから、すでに1世紀半以上経過したが、「日本」の夜明けは遠そうだ。

大学人として誰かとのふれあいを挨拶の中に織り込むのであれば、虚言と付度と隠蔽と改竄を政治手法の「種／心核」とした元総理などではなく、理性と教養と良識を併せ持つ人物を選ばなくてはならないだろう。前述の内村鑑三の無教会主義キリスト教活動ともつながる、第2次世界大戦敗戦直後の東京帝國大學総長・南原繁（1889-1974年）は、ときの内閣総理大臣・吉田茂（1878-1967年）から「曲学阿世の徒」呼ばわりされたが、動じることなく自らの信念と研究者としての良心を貫いた。南原総長は、キリスト者ではあったが、研究者として大学人として角のない「○」い人ではなく、鋭くとがった「△」な人だったに違いない。

林さんが理事長に就任された母校で「学祖」と呼ばれる山田顕義伯（1844-1892 年）は、2022 年に暗殺された件の元総理の郷里の先人でもあり、幕末動乱の時代を生き抜き、若き日にフランスに遊学している。そのフランスの象徴は、ドラクロワ（Ferdinand Victor Eugène Delacroix, 1798-1863 年）描くところの「自由平等友愛」を表わす三色旗を打ち振り、銃火をものともせず、先頭に立って「民衆を導く自由の女神（La Liberté guidant le peuple）」とされる。もっと時間を遡ると、彼の国には身を挺して母国を国難から救ったものの、異端審問にかけられ、火刑に処せられた「オルレ안의乙女（La Pucelle d'Orléans）ジャンヌ・ダルク（Jeanne d'Arc, 1412?-1431 年）」もいる。林さんには、是非とも彼女たちに倣い、母校の教育理念「自主創造」の旗を掲げ、教職員諸氏の先頭つまり「△」の頂点に立って、学生諸君の権利と利益を死守し、かりに大学が不都合な事態に直面しても、好ましからざる影響を受けるのは学生諸君が最初になる「学生ファースト」ではなく、最後になる「学生ラスト」にしたい。林さんには、大学に向かって吹き荒ぶ強風、押し寄せる荒波を全身全霊で受け止め、大学の改革発展に身命を賭する、という意味での「理事長ファースト」の覚悟を、直木賞作家らしい軽やかで明るく優美で力強い言葉で示してほしい。大学院生・大学生・生徒・児童・園児を合わせると、12 万人を超える規模の教育機関で、どのようにして「学生ファースト」を実現するのか。一朝一夕に実現可能な目標とはいえない。しかし「理事長ファースト」ならば、本人さえその気になれば、即時に実行可能だ。今の時代、林さんが大学改革の先頭にお立ちになられても、自由の女神やオルレ안의乙女のように、命を危険に曝すことはないだろう。お名前の「真理子」は文字通り「真理」を追究する大学人にふさわしいが、「福德円満」一皮むけば「見掛け倒しの役立たず」で、コロコロ転がる「○」い「毬」になられたのでは「○」。林さんには、「まり」つながりで、自由の女神マリアンヌを目指していただきたい。

内閣府によると、林さんは、2019 年 4 月 1 日に開催された「元号に関する会議」に有識者として出席されているが、どのようなご発言をなされたのかは存じ上げない。だが、結果的にこの会議を経て決まった新元号は「令和」だった。新元号「令和」について、私は、すでに小著『晴考雨読 年金暮らし春夏秋冬』（2021 年、芦書房）所収の「二〇一九年夏 レイワ異聞」で、「令和」は「零和（zero-sum）」に通じる、という主旨の異議を唱えているので、ここで議論を繰り返すことは避けるが、「○△□」とのからみでいえば、令ー零ー「○」、和ー輪ー「○」で、ともに「見掛け倒しの役立たず」の「○」ということになり、林さんの学識がどの程度のものかは、おおよそ見当がつく。

隣国・中国には「呉下の阿蒙にあらず」という故事があるにしても、今後の彼女に私が考えるような大学人としての知性や良識を求めることはどだい無理な注文のようだ。「呉下の阿蒙」と揶揄されていた時代の彼・呂蒙（178-219 年）は、単純な年齢の比較は慎まなければならないが、今の彼女よりはるかに若く、成長発展し、一大変身を遂げる可能性を有しており、実際に大変身を遂げた。また林さんよりもほぼ一回り年長のお方が、林さんの理事長就任と同時に学長になられた。昨今は、福祉政策の貧困による老老介護が珍しくないことから、お二人には、是非とも健康に留意されて、老老協働で大学の再生にご尽力いただきたい。お二人に、時代が違うとはいえ、57 歳で生涯を終えた寺田寅彦の言葉を献呈したい。「私の方では年齢の事などは構わないでいても、年齢の方では私を構わないではおかない」（寺田、2011、p.149）。

8. 「下」と「奥」一字違いで大違い

おそらく日本人ならば大方その名を知っているであろう一休さん（1394-1481 年）は、仙厓さんと同じ臨済宗の大物で、「我は本来、迷道の衆生、愚昧深き故に、迷えることを知らず」（一休、2001、p.220）と開き直っている。それに対して私はどうかといえば、妄想をたくましくしながらの迷走の連続で今日に至り、ときおり仙厓さんの遺筆の断片に接することによって、鼻の奥にある小さな脳を働かせて、金をかけることなく「気に入らぬ風」を楽しみ、鼻の奥の楽しみは口腹の楽しみに勝るともけって劣らない、という確信を持てるようになったものの、仙厓さんのように「堪忍 気に入らぬ風もあるふに柳哉」と笑い飛ばせないことも多々ある。

日本の未来に大きく関わる日本学術会議の、国民1人当たり10円負担すれば、お釣りがくる、たかが10億円程度の予算で大騒ぎをする国が、国民の過半が疑問に感じているにもかかわらず、21世紀の日本における「後世への最大異物」—信義誠実に対する無感覚と日本語能力の貧困に象徴される無教養を虚言と強弁で取り繕う強権政治手法の正当化—を社会にまき散らし、自由民主を装った悪しき世襲によって権勢を振るった人物のための、数時間の儀礼ならざる偽礼？欺礼？戯礼？はたまた虚礼？嘘礼？に、おそらく総額では上記予算の2倍を優に超えたであろう、もとはといえば血税の国費を平然と浪費する。この額は、欧亜大陸を挟んで反対側に位置する日本より小さな島国で、ほぼ同じ時期に行われ、世界中の注目を集め、多くの人たちが感動した、筋金入りの世襲による地位と一体化した noblesse oblige を果たす努力を生涯続けた女性の死を悼む、華麗にして荘厳な儀式のための費用をはるかに上回る。

楽しみ方にもよるが、鼻の奥底の楽しみは、口腹の楽しみほどには金がかからない。口腹の楽しみは余韻に浸ることができるにしても、ほとんど瞬間的・刹那的といってもよい。大枚をはたいて鼻の下と鼻と目で楽しんだ美味佳肴美酒名酒であっても、大方が2日もたてば、一部は血や肉や骨などになるとはいえ、あらかた余韻もろとも体外に排出される。しかも、その処理に少なからざる費用を要し、処理方法を誤れば、個人的な健康問題にとどまらず、社会的な環境問題にまでなりかねない。これに対し、鼻の奥の楽しみは、無限とまではいかないまでも、大量長期の凝縮されたかたちでの、万人に生まれながらに備わっている、極微小な場所への蓄積が可能であり、溜まれば溜まるほど品質品位が向上する。そのうえ、何度も繰り返し取り出しても、消尽することがなく、毎回違った味わい方をすることができ、その繰り返しが人間性／人格を高め、時空を越えての多様な方法で、多くの人たちと共有することができ、人類ひいては社会経済の発展にも寄与する。

こうした知的な営為が地球上で唯一可能な動物、それが人間であることを忘れないようにしたい。パスカル（Blaise Pascal, 1623-1662 年）は、このことを次のように表現している。「人間は一本の葦にすぎない。自然のうちで最も弱いもの、しかしそれは考える葦だ。…人間は自分を殺すものよりさらに貴い。」（パスカル、2015、pp.257-258）。

念のためお断りしておきたい。人間が生きていくためには、まず何といたっても、食料の確保が第1です。それさえ、農林水産省「プレスリリース 令和3年度 食料自給率・食料自給力指標について」（2022年8月5日）によると、2021（令和3）年度の日本のカロリー・ベース食料自給率は38パーセント、生産額ベース食料自給率は63パーセントにすぎず、私たち

は生きる糧さえ外国に大きく依存している情けない国で暮らしています。世界平和の維持なくして、この危うい綱渡り状態で、私たちは暮らしていくことはできません。ただ、そうではあっても、『新約聖書』の「人の生くるはパンのみに由るにあらず」（翻訳委員会，2015，p.14）という言葉は、人間の「健康と福祉」つまり「生命と生活」を長年考え続けてきた、キリスト者ではない私にとっても非常に重い。

楽しみハ 花の下より 鼻の下 ハナの下より 鼻の奥底 一樂

〈主要参考文献〉

- 秋月龍珉（2009）『公案 実践的禅入門』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。
- 飛鳥井雅道編（1996）『大杉栄評論集』（岩波文庫）岩波書店。
- 池田知久（2017）『『老子』 その思想を読み尽くす』（講談社学術文庫）講談社。
- 石川九楊（2007）『書と日本人』（新潮文庫）新潮社。
- （2013）『縦に書け！—横書きが日本人を壊す』（祥伝社新書）祥伝社。
- 一休宗純（柳田聖山訳）（2001）『狂雲集』（中公クラシックス）中央公論新社。
- 出光美術館編集・発行（2010）『生誕二六〇年 仙厓一禅とユーモア』。
- （2013）『仙厓と禅の世界』。
- （2018）『仙厓礼讃』。
- （2022）『仙厓のすべて』。
- 井原西鶴（堀切実訳注）（2009）『新版 日本永代蔵 現代語訳付き』（角川文庫）角川学芸出版。
- 上田閑照・柳田聖山（2006）『十牛図 自己の現象学』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。
- 内村鑑三（1970）『後世への最大遺物 デンマルク国の話』（岩波文庫）岩波書店。
- （鈴木俊郎訳）（1992）『代表的日本人』（岩波文庫）岩波書店。
- 栄西（古田紹欽全訳注）（2000）『栄西 喫茶養生記』（講談社学術文庫）講談社。
- 岡本太郎（2000年）『青春ピカソ』（新潮文庫）新潮社。
- 『科学新聞』第3118号（2006年10月27日）。
- 笠嶋忠幸（2021）「筆墨表現を鑑賞する視座—仙厓「○△□」を例に」『出光美術館研究紀要』第26号，pp.113-128, 179。
- ガスケ，ジョワシャン（與謝野文子訳）（2021）『セザンヌ』（岩波文庫）岩波書店：〈原著〉Gasquet, Joachim (1921) *Cézanne*.
- 川崎昌平（2007）『ネットカフェ難民 ドキュメント「最底辺生活」』（幻冬舎新書）幻冬舎。
- クラーク，ケネス（佐々木英也訳）（2007）『風景画論』（ちくま学芸文庫）筑摩書房：〈原著〉Clark, Kenneth (1976) *Landscape into Art*, new ed.
- Gray, J. A. Muir (2001) *Evidence-based Healthcare: How to make Health Policy and Management Decisions*, 2nd ed., Churchill Livingstone.
- 群馬県（2021）「上毛かるた」上武印刷株式会社。
- 玄侑宗久（2015）『仙厓 無法の禅』PHP 研究所。
- 小泉信三（1966）『読書論』（岩波新書）岩波書店。
- 小嶋勝衛（2006）「平成18年度役教職員年頭会同 小嶋勝衛総長・理事長挨拶」『日本大学広報』第747号，日

禅画と人文社会科学の視点

本大学広報部。

今野真二 (2017) 『漢字とカタカナとひらがな 日本語表記の歴史』(平凡社新書) 平凡社。

佐々木健一 (2010) 『日本的感性 触覚とずらしの構造』(中公新書) 中央公論新社。

シェイクスピア, ウイリアム (中野好夫訳) (2010) 『ヴェニスの商人』(岩波文庫) 岩波書店: 〈原著〉 Shakespeare, William (1596–1597) *The Merchant of Venice*.

小学館国語辞典編集部編 (2006) 『精選版 日本国語大辞典 第1巻・第2巻・第3巻』小学館。

城山三郎 (1999) 『花失せては面白からず 山田教授の生き方・考え方』(角川文庫) 角川書店。

鈴木大拙 (2007) 『無心ということ』(角川ソフィア文庫) 角川学芸出版。

— (北川桃雄訳) (2022) 『禅と日本文化』(岩波新書) 岩波書店。

高島俊男 (2008) 『お言葉ですが…』(文春文庫) 文藝春秋。

竹林滋編集代表 (2002) 『研究社 英和大辞典 第6版』研究社。

谷崎潤一郎 (2007) 『陰翳礼讃』(中公文庫) 中央公論新社。

ダライ・ラマ テンジン・ギャツォ (塩原道緒訳) (2008) 『世界平和のために』(ハルキ文庫) 角川春樹事務所。

寺田寅彦 (1927) 「金平糖」小宮豊隆編 (2011) 『寺田寅彦随筆集 第2巻』(岩波文庫) 岩波書店。

— (2011) 『天災と国防』(講談社学芸文庫) 講談社。

テオプラストス (森進一訳) (1982) 『人さまざま』(岩波文庫) 岩波書店。

永井荷風 (2005) 『江戸芸術論』(岩波文庫) 岩波書店。

農林水産省 (2022) 「プレスリリース 令和3年度 食料自給率・食料自給力指標について」(令和4年8月5日)。

野上弥生子 (1989) 『秀吉と利休』(新潮文庫) 新潮社。

バーリン, アイザiah (小川晃一ほか訳) (2000) 『自由論』みすず書房: 〈原著〉 Berlin, Isaiah (1984) *Four Essays on Liberty*, Oxford University Press.

パスカル, ブлез (塩川徹也訳) (2015–2016) 『パンセ (上) (中) (下)』(岩波文庫) 岩波書店: 〈原著〉 Pascal, Blaise (1680–1711) *Pensées*.

林田愼之助訳注 (2022) 『陶淵明全詩集』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房。

林真理子 (2022) 「理事長就任挨拶」『日本大学学報』第1078号, 日本大学企画広報部。

バルト, ロラン (宗左近訳) (2008) 『表徴の帝国』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房: 〈原著〉 Barthes, Roland (1970) *L'empire des signes*.

「防衛省仕様書改正票 小形乾パン (BISCUIT SURVIVAL) DSP N 5002G (4) 制定 昭和52.3.30 改正 平成30.6.26 附属書A (規定) 金平糖」。

堀和久 (1996) 『死にとうない 仙厓和尚伝』(新潮文庫) 新潮社。

翻訳委員会訳 (2015) 『文語訳 新約聖書 詩篇付』(岩波文庫) 岩波書店。

マーシャル, アルフレッド (永沢越郎訳) (1991) 『マーシャル 経済論文集』岩波ブックサービスセンター。

松村明・佐和隆光・養老孟司監修 (1993) 『辞林21』三省堂。

真屋尚生 (2008) 『学び心 遊び心—古典／名著／傑作／快作 と 人生／教育／社会／経済』慶應義塾大学出版会。

— (2021) 『不思議の国イギリスの福祉と教育—自由と規律の融合—』芦書房。

— (2021) 『暗考雨読 年暮らし春夏秋冬』芦書房。

— (1978) 「書評 山田雄三著『社会保障政策論』(東京大学出版会, 1977年)」『商学集志』第47巻第3号, pp.79–82。

丸谷才一 (2011) 『完本 日本語のために』(新潮文庫) 新潮社。

夢窓国師 (川瀬一馬校注・現代語訳) (2011) 『夢中問答集』(講談社学術文庫) 講談社。

- 無門（西村恵信訳注）（2007）『無門関』（岩波文庫）岩波書店。
- 森山茂（2014）『「ソーシャル」名講義を解く！ ヒトの言葉の真実を明かそう』ブイツーソリューション。
- 八波浩一（2022）「仙厓画—その変遷と変化」『出光美術館研究紀要』第27号，pp.179-205, 231。
- 屋名池誠（2003）『横書き登場—日本語表記の近代—』（岩波新書）岩波書店。
- 柳田国男（1979）『青年と学問』（岩波文庫）岩波書店。
- （2010）『遠野物語・山の人生』（岩波文庫）岩波書店。
- 吉川幸次郎（1978）『論語（上）（中）（下）』（中国古典選）朝日新聞社。
- 臨済（入矢義高訳注）（2007）『臨済録』（岩波文庫）岩波書店。
- ワールドロップ，M. ミッチェル（田中三彦・遠山峻征訳）（2000）『複雑系 科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち』（新潮文庫）新潮社：〈原著〉Waldrop, M. Mitchell (1993) *Complexity: The Emerging Science at the Edge of Order and Chaos*.
- 若松英輔（2020）『内村鑑三 悲しみの使徒』（岩波新書）岩波書店。

〈付記〉

本稿執筆に際し、松村哲夫君から、一部引用させてもらった私信のほか、多くの刺激的な助言と上州に関する貴重な情報を得た。また松村君からは、本小論の草稿を書き終えた段階で、私の日本語に関する問題意識に通じる多くの論点を整理し、広範多岐にわたる綿密な論証が展開されている前掲・屋名池誠『横書き登場』があることを教えられて一読し、非常に意を強くした。屋名池教授の論点と本小論における問題提起が重なる部分すべてについての注記は省いたが、私が全く気付かなかった論点については出典を明記し、教授による先行研究に敬意を表した。

禅宗と仙厓に関しては、佐々木憲文氏との数年来の文通を通じて、たびたび蒙を啓いてもらい、視野を広げていただいた。

むろん私にはお名前を知る由もない2名の本稿「査読員」には、細部にわたる非常に細緻精細な校閲をしていただいた。また匿名の native speaker（意識的にカタカナ表記を避けた）には、Abstract を校閲していただいた。これら3名の方がたからいただいた修正意見は、筆者の責任において、そのほとんどすべてを本稿に反映させたが、2名の「査読員」からいただいた「です／ます」調と「である」調の混用を「である」調に統一すべきとの指示には、あえて従わなかった。それは、本稿での筆者の試みが、表題に掲げた「価値多元化」を前提にした「人文社会科学の視点」からの「異端の問題提起」であり、秘かに「厓画無法」を文章において実験したことによる。

同様に敬称についても、ときに主観的な独自の基準で同一の敬称を使い分けている。一例を挙げると、同じ敬称「さん」でも、彼岸で「三聖」ほかの方がたと「○△□」談義に興じているであろう仙厓「さん」と、此岸で「正しいことを正しく行っているか？」いささか案じられる林（真理子）「さん」。同じ「さん」でも、これら2つの「さん」の間には天地の違いがある、といった具合に。

さらに、もう1点注記しておきたい。数字は、原則、算用数字を用いたが、「一行一字」「三角（形）」などの Key Words（前出 native speaker に同じ）には、意識的に漢数字を用いた。

本稿に掲載した仙厓の禅画4点は、すべて出光美術館の好意によって提供していただいた電子データによる。本小論の執筆に直接間接にご協力ご助力いただいた、すべての人びとに感謝します。

(Abstract)

Sengai Gibon (1750–1837) is well-known as one of the greatest Zen masters in Japan and also proficient in drawing and calligraphy. His Zen painting ○△□ with a brush and black ink seems so simple that even an infant could draw it, but it contains a truly rich and stimulated “core” of contemplation. Although I am a complete outsider to Zen studies, based on a keen awareness of problems as a native Japanese social scientist and as a book and Western art lover, from a different viewpoint than commonly accepted theories, I have recognised that △ is the symbol of the highest rank in the human world.

First, I will try to show the ambiguity beyond the world of Zen contained in ○△□ that existing scholarship has paid little attention, as far as I know, to Japanese language, figures, symbols, food, paintings, entertainment, arts, peace, education, reading, universities, character sketch, life and so on. Second, I will attempt to raise problems from the perspective of the humanities and social sciences in the broadest sense. Third, I will elucidate the significance of intellectual sensibility acquired through reading.

Finally, Sengai composed a witty moral poem: cherry-blossom-viewing is great fun but eating greater. It implies that bread is better than the songs of birds. Yes, in general, I agree with Sengai, but thinking is the greatest fun even if food security is most immediately important for human survival. Although I am not a Christian, I support the following phrases: Man shall not live by bread alone (Jesus Christ). Man is but a reed, the most feeble thing in nature ; but he is a thinking reed (Blaise Pascal).